



車軸は一つ、
私共の目的に異動はないが、
実行の手法は萬紅の輪影を作る。
私共は大義の車軸を廻つて、
應變の用意が出来てゐる。
ああ、何といふ芳ばしい諧律だ、
その均衡の破れない起伏、

諧 律



片付け、
何物も持たない身の軽きに感謝してゐる。



その統一の失はれない循環、
その天理への還元、
私共の業果はこの靈霧の間に上がるであらう。

共榮圏内の諸民族よ、私は自然を語つて諸士の一考を煩

はしたい……

私の庭に跪坐する松の老齡は痛ましい、
年々その葉を落すが補足の道を知らない。

されど殷盛雲のやうな高野槇は、

その背後から松の衰退を罵らない。

一つ葉や伽羅は一生脂粉を離れ、

女僧の寂しさに安住して、

蘭菊の美衣を羨まうとしない。



楓は左右に四肢を張るが、
側の木屑や樗の邪魔でない。

龍の髯、松葉牡丹、みな地に謙讓の徳を守り抜く、

今年は燃料不足で、私は櫻の枝を断つた、

だが櫻は運命に殉じて來年の春を待つてゐる……

ああ、これ協恭和平の訓示だ、

己を屈して他を稱へるの姿だ。

我が東亞の諸民族よ、

諸士は來つて、摩擦のない諧律に榮えることを學ばねば
ならない。

諸士は自然の大法一つに還元して、
共存共榮の聖途に急がねばならない。



破 壊

昨冬私は燃料の足しにと思つて、
庭の櫻一本をまる坊主にした。
女中は心不明で節約を知らない。
彼女はこの容易ならぬ薪を、
二週日の間に焚いて仕舞つた。
私は自然の破壊を後悔していつた、
『冬の寒さが何だ、なぜさう怖いのか、



ああ、春爛漫たる花の否定は罪惡だ、それは確だ。
私は不具になつた櫻に無言の譴責を感じ、
庭の自由と歡喜から遠ざかるに至つた。
然るに五箇月立つた今日、
金色の春光は庭に溢れた、
私は私を忘れてその樹影を歩いた、
私は頭を下げて春の律動を聞いた、
私は意外の神祕を見た……
私が斷つた櫻の肩に、腕に頭に、
新しい小枝がむくむくと群り、
見事な花は垂飾を作つてゐる。
ああ、不退轉だ、何たる意氣だ、
櫻は私の破壊に微笑をもつて答へた、



何といふ修理の旺盛よ、

私は五箇月の魔法を花一つ一つに見た。

私は銘していふ、

『ああ、自然の驚くべき復活よ、

刷新力の軒昂よ、

自然は破壊によつて轉換と樹液を更に新しくする、

私は自然が苦痛を知つて新生に入ることを知つてゐる。

私は自然が迫害に勇氣百倍の機を見ることを知つてゐる。

國家もまた斯くの如く、

破壊を抜いてその新體を語ることが出来ない、

破壊だ、破壊だ、破壊によつて靈的脱皮を遂げるであらう。



國家は受難に身を洗つて鏤骨の路を求めらるであらう。

贅疣を拂はずに自己の純一は期せられないであらう。』



大河の決する如く溢らせよ。』
 ああ、誰かわれ等の大言壯語を云々するものぞ、
 われ等は宣言の責任を避けない、
 だがわれ等はくだい説明を知らない、
 辯論はわれ等の所有でない、
 われ等は言語の錬術を知らない。
 ビラは再びいふ、
 『ああ、誰が人生再建の責任者だ、
 誰が國家の精神陶冶に對する責任者だ、
 誰が人類に缺けるを補ふ責任者だ……
 誰でもない、卿等だ。』
 ああ、ビラは新しい世界の形態に急げとわれ等に叫んで
 る、



辻詩 太陽の子

私は辻にビラを貼りつける、
 文字は使命の火に燃え、
 血汐は街上に落ちて渦を作る……
 渦に私は一億一心の闘志を見る。
 ビラはいふ、
 『卿等四千年の生氣を飲みほし、
 血管のなかに、骨のなかに、



ビラは大地に生の光明を降らせよと太陽の子に叫んでゐる。



乾坤一擲

秀吉も家康も、乾坤一擲の夢を刀と槍の間に求めた。
 本阿彌光悦は京都鷹ヶ峰に沸る大虚庵の釜に夢を見た。
 ああ、本當にこの乾坤一擲が無いと、若し君が畫家ならば、勿論君は、一つの草花も立派に描けないであらう。
 また若し君が單に土方であつても、恐らく君は一尺の穴も満足に掘れないであらう。
 私は乾坤一擲の態度で詩を書く。



君は日本へ来た……
日本は回天の意氣に燃える、
東亞の解放が脈搏に響く、
道義の讃歌が血管に鳴り渡る。
ああ、日本が作った東亞の黎明よ。
我等は闇黒の縛れた髪をほごした、
光明の眞珠を遙かビルマに撒いた。

黎明の門を開かん

チャンドラ・ボースを迎へて



私の博奕は一點張りだ。
當るか外れるかどちらだ。
私は失敗に顔を曇めない。
最後の勝利が失敗の廢墟に築かれることを知つてゐる。



だが妖雲未だ印度を蔽うて、
悪魔は陰暗を利用して奸を練つてゐる。
君は日本へ来た……
君の使命がもう一段の努力を、
我等に要請することてなくて何であらう。
我等は印度にも聖雨を降らして、
新しい時代の生命を分つ、
もつて有終の美を成す、
これ日本の天務だ。
私は君が怯懦でないを知つてゐる。
君が流血と骸骨を恐れないを知つてゐる。
君は哲理や空論を弄しなかつた、
君は心に劍を磨いた活人であつた、



君は弱冠、フルーナ・スワラジを唱へ、
救國濟時に蹶起した。
君は日本へ来た……
我等と共に泥濘と恥辱を捨てねばならない。
君は今日日本の軍馬ビルマに嘶き、
黎明の門を開けと印度に迫る時、
君は祖國の再生を叫んで、
我等が捧げる光明の放射に踊り込まねばならない。
ああ、君は我等と共に愛國の義に生きるを期せよ。

註 フルーナ・スワラジは完全な獨立を意味する印度語。シュバス・
チャンドラ・ボース伯林より東京へ飛來せる報傳はつてゐたが、昭
和十八年六月二十日表面に出てその決意を表明した。



廢墟の聲

毀れた煉瓦の山、横倒れの砲車、
その影に聞える聲、廢墟の聲、
私共はこの聲をマニラに香港にマライに聞く、
『白人野望の圓柱むくむくと天に上つた、
されど太陽の一滴に皆な地に落ちるに至つた！』
私共は嘗て米英が優越僭取の横車を見た、
私共は彼等が教會の屋根を金に塗り、私慾に神を亂用



したことを見た、
私共は彼等が土民の手足を挽ぎ、牛馬の間に奴隷を強
ひるを見た、
私共は彼等が自己満足を搾取に酔ふを見た。
今彼等が虚榮の輕羅を翻して、土民を鞭した所に、
蜘蛛巢は『白人不可入』の網を張つて、廢墟の道を閉
ざすであらう。
彼等が嘗て愛人と共に人生の春を祝杯した所に、
野薊は冷笑し、蜥蜴は側の風に彼等の行方を問はない
であらう。
ああ、忠勇無雙の皇軍兵士よ
諸君は廢墟をそのまま廢墟として保管しなければなら
ない。



それ等は白人罪状の生きた記録だ、
 彼等の悪業を永劫に極印する記念碑だ、
 私共はそれに天を恐れなかつたものの最後を讀むてあ
 らう。



道 一 筋

暴波、疾風、
 逆捲けのぼれ！
 我等創造の光り追ふもの、
 怯えず、戦かず、恐れなし。
 我等苦惱に身を清めたり、
 血もて心一つに洗ひたり、
 ああ迷ひなき身は輕し……見よ、



世界の歴史改まらんとす、
新しきもの古きに代らんとす。
大義名分既に成り、
守るは叡智の鐵壁城、
身もて立證する犠牲訓、
我等鐘を打つ、建設の新世纪を叫ぶ、
道は一筋、如何に波暴れ風早くとも、
我等往く、光り求めて千里往く。
われいふ、『卿等いづこに死するも、
墓場は一つ、快樂蹴ちらせ、
國に殉ずる勇氣に二なし！』



銃後の守備

妻が障子の破れを切張りしてゐる。
私は彼女に女性の代表を見る、修理の戦士、
黙々として掃除し、雑巾をかけ、衣服の綻びを繕ふ、更
生にいそしむ智者、
言挙げせず、瑣事に神祕を展く、神ながらの行者。
ああ、わが國は細戈千足國、
八百萬の神々皆な武勇の將、



われ等剣を提げ天上を走るも、
内に銃後の守備十全なくんば、
如何ぞ九十九を百たらしめんや。
神は男女を別にし、陰陽の理に則り給ふ、
夜と晝二つあつて宇宙全く、神意のほど畏し。
妻よ、私は女性の代表としてお前の手を握る、
白紙の委任状を託し、お前の智恵と忍耐に信頼する。
私は粗暴、しばしば思慮乏しく祈禱と感謝に遠ざかる、
おお妻よ、替つて天の恵を認識し、
私のため自然に報恩の燈火を點ぜよ。



戦史の語らざる戦役

我年頭に際し神前に静坐して、
國運いや榮かに茂り、
隆盛虹の如く天を往くことを喜ぶ。
東亞の大役始まつてより一ケ年、
誰一人我が戦果の驚異を稱へざるはない。
實に驚異なるは論なけれど、
人あつて戦役の最も勇敢にして嚴肅なるもの、もう一つ



他にあるを語らざるは如何。

諸君は東亞の地圖を展べると雖も、

この戦役の跡いづこにあるか知らないであらう。

諸君は我に問はん、『戦史の語らざる戦役、最も勇敢にし

て嚴肅なる戦役とはいづこの役なるか。』

我諸君に答へん、『この戦役の驚異は飛行機天を亂舞せざること、

戦車の轟、砲火の爆裂また突貫の叫なきことなり、

しかもこの戦役こそ日本女性の胸奥に戦はれたる大役な

り。』

ああ、隱忍にして苦に堪へる日本女性、

ああ、貞節法を守つて身を義に殉ずる日本女性、

ああ、慈愛よく蠻勇を挫いて男に後顧の憂を斷つ日本女

性、

彼等は深く閉された胸奥の戦場にて降服の何たるを知ら
ない。

彼等は黙々として心靜かに部署を擁して聖なる天業を分
つ。

彼等は野營の歌を唄はない、進軍の喇叭を吹かない、

されど隊伍整然人生を戦ひ抜き、

聲高らかに凱旋を誇ることなくただ戦果の貧しきを恥づ
る。

今我年頭に當つて國祖恩の甚深無量なるを偲び、

國祖大神の女性にまませしを思つて、

我三拜九拜して申すらく、

『我等にかかる女性を與へ給ひしことこそ有難き、實に



一つの聲が雲から雲へ空中に鳴り響く、
『生めや殖やせよ、殖やせよ生めよ！』
庭の花は唇や額を朱に染める、
蔦葛は手を延ばして感情を握る。
蝶は何れも哀樂の酒に酔ひ、
生活愛の狂宴に侍る。
聲が雲から雲へ空中に鳴り響く、

空中の聲



尊い哉。』



『生めや殖やせよ、殖やせよ生めよ!』
鳥は羽に印した艶書の謎を地上に落し、
獲物が誘惑の迷路に立つを待つ。
蛇や蝙蝠は夜の巢に退き、
愛が憎悪の眼を開いて玉子の瞬るを見守る。
聲が雲から雲へ空中に鳴り響く、
『生めや殖やせよ、殖やせよ生めよ!』
人生は愛と生産あるのみだ、
君は歡喜に後悔と苦痛の代價を拂はねばならない、
君は祈禱か呪の法則に服して生産しなければならぬ。
ああ、悲しいしかも幸福な奴隷よ、
君の仕事は柔和に空中の聲に答へることだ、
『生めよ殖やせよ、殖やせよ生めよ!』



大戦果發表

『お父さん、軍艦行進曲……早く早く、大戦果發表だ。』
私は子供の聲に答へ、書齋の障子を蹴り、
大本營發表のなかに飛込む。
果然南太平洋加へてソロモンその後の戦果集積……
ああ、日本臣民誰か發表の一語一語に血湧き血躍らない
であらう。
二ヶ月間も待ちに待った發表だ、



ああ、誰か感謝の涙に崩れないものがあらう。

敵艦撃沈大破總計八十四、

屠つた飛行機七百に上る、

されど我が未歸還機百を數へる。

私は發表終つてスキッチを切り、

闇黒に坐つて轟く胸を抑へんとする、

この時二週日前の夜、招魂の嚴儀にラジオに流れた言葉、

『今ぞ神になつて祖國を護るわが父、わが子、わが夫……』

との言葉、

この私の心に宿つて去らない言葉が、

悲痛に響いて來て私の全身を噛む。

註 昭和十七年十月二十八日夜、大本營より南太平洋海戰ソロモンそ
の後の海戰々果發表せらる。



號外賣

默禱は終つた、往け、立ち上り往け、

希望は君を待つ、勝利は君を招く、

白紙は君の詩を呼んでゐる。

鳥は喉を脹らまして唄ひ始めた、

犬は臥床を離れて走り始めた、

花は露を拂つて杯を開き始めた。

君は今天賦の重大使命に就かねばならない、



隣人は運命の羅針盤を君より得んとしてゐる、
自然の原理と遂行を君から教へられんとしてゐる、
解放と秩序を君から學ばんとしてゐる。

(私は家外を通る號外賣の大聲に耳をそばだてる、

『マニラ陥落！ 皇軍シンガポール肉薄！』

ああ君は全亞細亞を嬰兒の如く抱きあげ、

思想が思想を新しく生み出し、

希望が希望の上に重なり行く方式を教へねばならない。

君の使命は重大だ、でも拒むことが出来ない、

君は謙讓で忍耐強く仕事を完成せねばならない。

大地は微笑み始めた、君の種子を下すのを待つてゐる、

そして種子が果實に生長するであらうを期待してゐる。

黙禱は終つた、立ち上り往け、



(私は再び號外賣の大聲に耳をそばだてる、

『皇軍マライ協力！ 共榮圏の前進！』



國府の宣戰布告

林伯生に贈る

君は流血を知らない和平なしといふ、
ああ良い哉言や、吾等これを待つこと久し……
貴國起つや敢然、
ああ、遂に怯懦でなかつた。
貴國日本の手を握る、
同生同死を誓つて血を啜る、
日支はもと車の兩輪、



この比喻遂に空しくなかつた。
ああ壯なる哉、日本の『一億一心』
今二億一心の大義に燃え、
協力完璧の實を期せんとす。
昔我が聖天子、貴國の劍を腰に、
弓と矢を肩にし給ひしことがあつた、
今貴國にその劍、その弓その矢を返し與へる、
貴國それを帯びて武者振り雄々しく、
共同戦の必勝必滅に立つ……
ああ涙なしに吾等が友を呼ぶことが出来ない、
異身同體の誓ひ遂にあがつた。
されど英米打倒道遠し、
峨々たる山岳吾等を阻むも、



我等の行く手一あつて二無し、
胸に聖火を抱いて、
暗夜の鬼を劈くであらう。

註 昭和十八年一月九日支那國府宣戰を布告す。



ビルマ行政府長官一行を迎ふ

我は見た、篠突く驟雨一過、
綿のやうな濃霧、左右に開く、
ああ、秋空高く緑を流す所に、
シュウエ・ダコン、靈光の燦然たるを……
これ荆棘を破つて聖火に參する擬象、
これ精神の貪を捨てて、天の恵に浴する表徴！
我今諸士を迎へて黄金塔を偲ぶ……



諸士に希望と光明、
身を挺して國土に殉ずる意氣を見る。
我は知る、共榮圈内未だ國あつて、
自由と解放の眞義を知らない、
永年の奴隸安易に立つ力を持たない。
諸士よ、願はくば彼等に新生の諧調を奏で、
涙に唄ふ祖國愛の壯なるを傳へよ。
我諸士の手を握つて語を捧げる、
『我等血杯を酌んで、受難を分ける、
最後の勝利は怯懦の道を踏まない、
我等は犠牲によつて建設を求め、
我等が亞細亞、
生の原則と韻律に觸れる所に



我等の繁榮永へなるを知る。』



歓迎の辭に代ふ

大東亞文學者大會に際して

今日秋風颯々たり、吹いて止まず、
ああ、吾等に告げんとするは何か。
風語つていふ。

『敵性國家、後退し、
暗澹たる夜、影もなし、
明けゆく東天、登るよ朝日、
洋々たる光、亞細亞を蔽ふ。』



今ぞ卿等夢を談ずる時だ、理想を語る時だ、光榮の過
去を追想する時だ、

ああ、世界に冠たり、四千年の眞善美、我等に炳乎と
して燦たるを思ふ時だ。

卿等亞細亞一つの歴史に溯り、
祖先の夢に歸一し、建設せよ建設せよ、往け、往け、
文化の戰士達、正義を追つて氣軽く、夢を現實に求めて
退くな。

地に伏し天を仰いで、
神に感謝し、身を挺して行に就け。
卿等使命の嚴たるを知り、神に誓の喇叭を響かせよ、
鳶幾百羽圓を描いて、卿等の前途を祝ふであらう。』



我等謹んで風に答ふ、

『血もて繋がる東亞の諸民族、

今一堂に會して、大義を誓ふ。

八紘爲宇の神意に則り、潑刺たる感情、博き智識、以て東洋維新に邁進せんとす、

我等世界の新秩序に急なるもの、

我等文化と平和の理想に殉ずるもの、

我等は知る、文武分れて二、されど合して一、

機に應じ變に處して、忍耐努力、冀はくは天意を安ん

ぜんとす。

ああ、今や闇雲破れて氣清し、

一陽來復の春、期して待つべきのみ。』

第三部



死の褥に横たはる時

樹木に日光風雨を選択する権利はない。
私共は人生の凡てを完了するに當つて、
罪惡を逃げ廻ることは卑怯だ、
君は山上の松を叩いて、
自然の暴威下に身を正すの訓言を聞け、
君は田野を彷徨ふ河水へ行つて、
如何に自處を求めぬかの道を體認せよ。



君は活劇の残骸を積み重ねて、
自分の墓標を築かねばならない。
君が争闘終つて死の褥に横たはる時、
影青白く衰へた體を撫するを止めよ、
君は黙禱と經典に離れたるを憂ふる勿れ。
神は自姿の片影を僧庭の思想に拾はないであらう、
神はそれを罪惡の血と悔恨の間に求めるであらう。
君は現實の酒杯を零まで飲んだ、
そして君の罪軀が神のそれに近いことを感謝するであら
う。
君が神より招かれる時刻々に迫るを知らば、
君は最後の姿勢を正しく整へねばならない。
神は諧律と均齊に對し門を廣く開き給ふ、



君は人生の敗残者にて海に溺れんとするを諷せば、
神の愛いや榮えて君に加はるを信じ、
茫漠たる地平線遙か彼方に、
希望の曙光照り初めるを見るであらう。
君はこの時、君の小艇に聖旗を翻し、
勇ましく船出の歌を響かさねばならない。



宣 言

いや増しの暑さに榮える百日紅あり、
その幹、その枝は高野山の坂に並ぶ癩病の擦粉木に似た
れど、
太陽にあこがれる赤き心に永生の喜あり。
蟬は驟雨の祈禱を地上に降らせど、
百日紅は獨り黙然として生死一如の道に生きる。
ああ、我が猫額大の庭は不滅の聖土となり、



詩城を守る周囲の生垣を見るに、
各自に神護我にあるの自信あり。
庭には松、杉、楓、或は伽羅、八つ手、
一生花を知らざるアスナロウ、龍の髯、一つ葉、
何れも黙禱の間に普現の叡智を練る。
ここ都の中央を去る僅に電車で七八分、
徑路の登るべきなく又山嶽の高きなけれど、
觀ずるにこれ詩神の靈地なり。
我今金堂を建てて萬代を記念し、
恭しく無詩界の民衆を加持して、
能ふ可くんば彼等を情調の福祉に入れんとするなり。
我に美妙の言葉なけれど、心に鐵を鎔かす感激あり、
人若し我が靈地に入らば、必ずや



詩即國土禮讚の一義に目覺めるならん、
ゆめ我を疑ひ給ふな。



飛 龍

光の飛龍よ、お前は日本だ、
お前の走る所に空間は驚駭の渦を巻いて、
お前の突撃を廻るであらう。
時間は動搖の嵐を納め、
凝視の黙讃を誦して跪くであらう。
日本よ、お前は急劇を阻む何物をも知らない、
雲はお前の四肢に集結して、



生の驟雨を降らすであらう、
發育の新芽を脹らますであらう。
お前の一つの擧と動は皆な旆旗となつて、
永久の勝利を記念するであらう。
ああ、何たる飾環がお前の脈搏に答へるであらう。
何たる世紀の讃歌が旋律を作るであらう。
お前は疲労を知らない至靈だ、
だが若しお前の前進が衰へたならば、
世界は一つの土塊、
單なる障害となつて人生を閉ざすであらう。
今や世界の洪水は端から端へどよめき高まる、
お前は有らゆる危機を乗り越え踊つて、
希望の戦果を萬里の彼方へ運ばねばならない。



力の氾濫だ、
 初夏の空は黄金を降らせる、
 海は深い底から歡呼を集めて
 不死の世界をお前に捧げる。
 ああ、海の子、大和男の子、
 ますらをよ、船出だ、往け、
 海は光明の合唱をお前に送る、

海の子



日本よ、飛龍よ、お前は闇黒の彼方へ、
 無限の光明を漲らしめねばならない。



生のいぶきをお前に散らせる、
無限の彼方に望をかける者、
永劫を目指して海を往く。
お前は元信が描いた鐘離權だ、
彼は青龍劍の名人、密法の行者、
劍に乗つて大海を渡つた。
お前も劍に船して夢を漁る、
海の起伏をお前は知らない、
嵐の恐怖はお前を離れる。
お前は勝者、海の子だ、
ああ、壯なるかな、お前の船出、
神もお前を送らざるを得ない……
見よ、富士は雲を拂つてお前を見詰める、



黙禱を誦してお前の聖途を清める。
富士は無終の哨戒に形を正して、
お前の將來を見守る。
神護に答へて、海を往け、
ああ、海の子、大和男の子。



戦争の悲惨に野獣を脱して、
神性に觸れるものが最後の勝利者だ。
戦争は人間の形態を破壊し、
人間の制約を粉碎する、
人間の價値を顛落させる、
だが新生の創造は廢墟の間に生れる。
怒號だ、猛撃だ、戦争だ、破壊だ、
破壊を最後まで極めるものが勝利者だ。



勝利者

丸は飛ぶ、
戦車は荒れる、
飛行機は唸る、
敵も味方も血を浴びて倒れる、
ああ、絶望の暗雲は大地を蔽ふ……
破壊の闇に使命を意思し、
再生の光を求めるものが最後の勝利者だ、

洗 滌



汚濁のない所に洗滌はない、
二つが循環して生の律呂を整へ、
黙々の間に創造の實を擧げる。
古書は我等に語る、
遠つ親神が國作りし給ふ時、
彼等は襖被ひ終つて、
自發の汚濁を捨て給ひ、



他の諸神その間より生れ給へりと。
實に汚濁の亂を一洗せずして、
創造の曲は奏てられない。
私はいふ、
『汚れよ洗へよ、
人生の實相は汚濁と洗滌の二諦だ。
我等は日々汚濁を重ねる、
そしてその都度それを洗滌しゆく、
かくて我等の眞實は莊嚴にまで高まる。
我等が汚濁を滓とも飲んで、
それを排泄し終つた時、
我等は遠つ神のやうに生の凱歌を、
天つ浮橋から響かすまでであらう。』



死の晴着

銀杏の葉がばらばら散る、

神兵天くだるだ、

落下傘だ。

私はしばしの間、地上に落ちた銀杏の色と姿を眺めるて

あらう。

灰色の地面を黄色に染抜くその姿を譬へるに、

それはまるで網にかかった金魚だ、



否な、黄金紙の護符だ、

御幣だ。

人は枝に煙る五月の青葉を褒めるが、

誰が秋の落葉に死を歎美するだらうか。

また庭の地面の見事なことはどうだ、

如何なる畫家もこの色は出せないであらう。

美の極致だ、

有らゆる色の綜合だ、

否な、無に結集した最後の飽和だ。

私は今銀杏の枯葉を自分と散じて、

死の頌歌を自分の魂に捧げたい、

自分が黄金の晴着に包まれて、

嬉しさうに死んでゆく姿を、



時と空間を超越する者、
 お前は空中に魔手の揺れるを見るであらう、
 お前の平凡への反旗は、翩々と驚異の風に靡いてゐる。
 奇怪な荒行者よ、
 お前は不思議な妖魔の鷲頭獅子だ、
 お前は現実の間に不合理の騷擾を上らせるかも知れない、
 お前は祕法の道士だ。



ちつと三步退いて眺めるであらう。



ああ、悲痛な叫が沙漠の彼等から吹き寄せるを聞くものは誰か、
再び来ない運命に起つて剣を握るものは果して誰か。
私は悲鳴に打たれて、
大地は戦き無名の墓標に化するであらうを知つてゐる。
私は詩歌の花一つ二つを摘んで、
慰め難い人生の額に置くであらう。



英國・罪惡の追加

ガンジীর逮捕

ガンジীরよ、英國は君の手を捕へて錠を下ろした。そして君を牢屋へ引つ張つた。君は微笑んで英國に體を投げだし、その欲するままにした。なぜならば、君は自分の體が、蛻の殻であることを知つてゐるからである。

血迷つた亡者の英國、咄！ 汝の名前は『敗れたる者、』汝は今汝のインド罪惡史にもう一ページを追加することだけを知つてゐる。

英國は牢屋に打込んだガンジীরが、彼の十貫にか目方しない體



であつて、彼の魂でないことを知らない。

ガンジীরの魂は磐石の如く、印度民衆の間に坐して動かかない。……そして昨日のやうに、十年前のやうに、廿年前のやうに、否卅年前のやうに、彼の魂は苦節と犠牲を民衆に叫び續けてゐる。彼等は一齊に彼の叫びに答へて、英國打倒の十字軍を進めてゐる。私は今、遠く印度を離れて日本にゐるが、私の耳は隊伍堂々と前進する印度人の登音を聞くのである。私の目は『英の羅馬帝國倒れよ』の旗、翩翾と風に靡くのを見るのである。

ああ、誰が彼等の勝利を疑ふことが出来よう！。彼等は眞理の道を往く者、運命の招に應じて前進する者、如何なる惡鬼と雖も、彼等を阻むことが出来ない。しかもガンジীরの魂が、彼等を守護してゐるに於いてをやだ。

私は今眼を閉ぢて、ガンジীরが牢屋のなかに獨り坐つて、心靜



かに斷食の嚴行についてゐる神々しい姿を見るのである。

ガンジীরはかういつてゐる、

『神に信仰の糧を求めらるものは決して希望を失はない。私は斷食に身を清めて眞理に跪くのだ。』

『私は今自分の足らざるを知つてゐる。私の戦ふ武器は、ただ斷食の一つしかないことを知つてゐる。即ち私は自分の生命をさらけ出して、抗爭する外に道のないことを知つてゐる。』

『潜水夫は海底深く深く潜つて、麗しい眞珠を求めらる。私は眞理の底深く深く潜つて、自分の誤つたのでないといふ確認を神に得んとする。そして眞理の追求は、斷食によつて身を軽くさへすればいい。』

ああ、ガンジীরの斷食嚴行の姿こそ、人間の歴史中最も重大な悲劇の表徴でなくて何であらう。これこそ實に豫言者イザイアの



奴や十字架にかかった基督にも劣らない受難の悲劇でなくて、あ、何であらう。

ガンジーはボンベイの演説にいつた如く、英國の過誤を是正するために、大抗争に入ったのである。然るに英國は、それを感謝せずして、彼を牢屋に入れた。若しガンジーが牢屋で死んだならば、英國の罪は印度を失つただけでは償はれない。

私はその時印度へ赴き、ガンジーの屍を拾つて、彼の記念碑に
かう刻むであらう、

『永劫に打勝てる者マハトマ・ガンジー。』



印度、月を失ふ

ガンジー夫人挽歌

ああ月遂に亡びた、太陽は永へに天の伴船を失つた……
印度よ、喚いてはならない、ただ心に喪章をつけ運命を
呪ふのみだ。

だが彼女の静寂な最後を傷つけてはならない、

彼女の寛容と宏量を天に奏てよ。

彼女は愛と隠忍の權化、

美と貞淑の標本、



純潔にして痛ましい生涯、
誰が彼女の受難を涙なしに語る事が出来よう。
彼女は夫に己が肉を捧げた、
彼女は彼に血を注いでその徳を稱へた、
彼女は彼の忠僕であつた。
彼女は彼に不可侵の法律を見た、
彼女は彼に靈感の爆發を聞いた、
彼女は彼によつて闇黒を照らした、
彼女は彼に神を見た……
否、彼女は夫を通じて印度へ献身した。
實に彼女はガンジーの手細工、
彼の思想と信仰の絲で紡いだ人形、
彼は彼女に呼氣を吹込んだ、



彼は彼女の脆い器に魂を満たした。
彼女は彼に従つて手を動かし足を踏んだ、
彼女は彼に和して自由と獨立の聖歌を唄つた。
咄！ 英國はガンジーを縛つてその靈感を汚した、
彼が思想の自由を封じた、
そして彼が手細工の人形を奪つた。
人形は今吹込まるべき呼氣を知らない、
ああ、憐れなる人形は魂を失つた、
ただ路傍に横たはる土塊の一片となつた。
印度よ、お前の月無き夜は闇だ、
英國の魑魅魍魎はお前の畑を荒し、
お前の森に林に罪惡の酒宴を興ずるであらう。
ああ、印度よ、起つて燈火を點じ、



聲を大にして英國の退散を叫べ！

註 昭和十七年十月二十四日發羅馬特電はかく傳へた、『當地に達した情報によると過般來英官憲のためブーナに監禁されてゐたガンジ―夫人が監禁中死亡したと傳へられる、同夫人はガンジ―との結婚生活六十一年間獻身的な内助の功をいたし、先般會議派全印委員會の反英決議採擇とともに、ガンジ―が英官憲のためアガ・カーン宮殿に監禁されるや夫人はガンジ―と起居をともにしたいと申出たが容れられず、ガンジ―とは別個に監禁されてゐたものである。』



印度

印度よ、

お前に自分の歴史が無い、
だが若し有るならば、それは苦の歴史だ。

『苦に住する者は苦を友にせよ』と芭蕉はいふ……

お前は奴隷國の苦を接吻と合體によつてその苦しみを忘れようとするか。

『悲みなしに憂からまし』といった日本人は西行法師だ



……
お前は獨立成功の場合さぞ寂しからうと心に想像したか、
お前は自由を口に唱へて悲哀の縁を繋がうとしたか。
お前は解放を叫び續けた、
だがお前は眞實それを掴みたいと思つたらうか。
芭蕉は『遂に無能無才にして句の一筋につながる』とい
つた……
お前は反英抗爭に口頭禪の熱狂を樂しんで、
宿命的な無能無才に生きんとするか。
お前が悲劇的な姿は痛ましい、
私はお前が運命の重荷を脊負つて人間滲透の旅に上るを
眺める。
私はお前が内省の人間として古今獨歩、



天下無二の存在であることを知つてゐる……
私は印度の山や河、至る所に樹下石上の嚴行を見た。
私はお前が現實的に弱いことを非難しない、
お前は本質的に人間滲透を極めるのが本領だ、
然しお前はその眞價がお前の力で發揮したと思つたか。
英國の無慈悲な迫害あつてお前は出來たものに相違ない、
お前の靈的存在は英國が無意識に作つた手細工だ。
英國の沒義道が荒れると荒れるほど、
お前の眞價は倍加して光つて來る。
印度よ、お前は稀有だ特殊だ、
だがお前は眞珠の玉を握つた裸の潜水夫だ、
お前は經文だけしか讀めない盲行者だ、
お前は悲しい歌を永劫に流しゆく人生の辻歌手だ。



お前は轟く飛行機や戦車を恐れて、
貝殻をばつたり閉めた蛤だ、
お前は誇と小心を抱いて怯える悲劇役者だ。



藝術の祭典

藝術の祭典始まる。

ヨッショイヨッショイと押合ひ揉み合ふ神輿擔ぎの混亂でない。私共新しい人生と將來の幸福を期待するもの、一堂に集つて藝術の神託に參し、創造の聖機を求めんとするのである。

藝術の神苑は靜かだ。私共は祭典の徳により、長く失はれた本來の高崇を取りもどさんとするのである。

私共日本人は血管のなかに骨のうちに、純眞で明朗な藝術の血



潮が、流れてゐることを知つてゐる。今これを清める、そしてこの更生の歡喜を、苦惱に力を失ひ精神的重心を逸した同胞に分ち、彼等の痺れた魂に、豊かな希望を與へんとするのである。私共は彼等に本當に生き行く道を教へたいと思ふのである。

皆のもの來つて祭典に参加せよ。何といふ優美で健康な光が神苑に溢れ、何といふ希望の音律が、目に見えない泉から湧き出るのであらう。私共はこの神祕に觸れて、祖國の精神を確認し、これを禮讃することが、即ち將來に生きる所以であるを知るのである。

今國家が人生の再建設と精神的陶冶を念とするに當つて、私共が如何に過去の偉大な藝術家が、今なほ燦然たる生命に輝いてゐるかを覺る時、疑もなく美と眞理の歴史だけは、永劫に榮えることを知るであらう。



人魂

私は少年時代に人魂を見たことがある。

ある初夏の夕方、家の前に立つて隣家の子供達と雑談に耽つてゐた時、どろつと鉛色した杓子型の怪しいものが、ふはりふはりと飛んで来て、家の後に見えるお寺の松の木にすうつと消えて行つた。私はこの時、通りすがりの婆さんが、立ち止まつて獨語するのを聞いた、『人魂だ、誰かが死んだらしい。』

私は詩を書く時、いつもこの人魂のことを思つた。私は自分の詩が、杓子型の怪しい恰好をして、紐のやうな尻尾を曳いて薄暮



の空中を、ふはりふはりと飛んで行くと想像した。実際に私は死の思ひで詩を書いたのである。

若し私の書いた千篇の詩が、いづれも人魂であるならば、千箇の鉛色した杓子型の怪しい姿が、空中に飛ぶことになる。人はこの光景を見て、何といふだらうか。人は私の魂が餘りに多いのに驚くだらうか。それともそれを恐しい事だとするだらうか。

芭蕉は、『時には人に勝たんとした時には捨てんとしたが、遂にこの道一筋に繋がって来た』といつて、彼は詩を運命に歸した。芭蕉は三百年の暮に於て、私の氣持を正しくいつて置いて呉れたのである。若し私が詩を、天の使命だと信ずるに至つたとしても、それは運命が私を然らしめたのだ。



拈華微笑

木は葉を振り落した、

(私も詩の葉つばを散らした、)

寒天に瞑目して動かないその姿は槍の如しだ、

今晏如たる冬眠に入つてゐるのであらうが、

端から見ると餘りに荒涼たり過ぎる、

ああ、冷い姿だ。

(私も第三者にさう見えるであらう。)



私は満目一点の紅を見ない地面を、
二本の足で釘を打つて行く、ざくりざくりと……
私は一本の木を洗ふ細流の側に立ちどまる、
そして過去幾十年の間、餘りに注意しなかつた一つの光
景を見る。

それは水面からたち上る温い霧を隔てて、
逆さに映つてゐる木の姿だ、
何といふ柔軟な線の交叉だ。
何といふ麗しい銀色の四肢だ。
私は頭を上げて葉つばのない木を見るに過ぎない、
枯木に等しい荒涼たるものだ。
私は叫んだ、『地上の姿は嘘でない、勿論のことだが、
水中の姿にもう一つ本當のものがある。』



私を詩の枯木のやうに思ふ人に敢へていふ、
否ないな、私はいふ所がない、
何事も拈華微笑だ。』



第二の思想

私は昨日詩を幻と観じた、
私はその恐怖に打ちのめされた魅せられた、
また引寄せられた後へ追拂はれた……
半しか知れないものは、
どんなに莊嚴であつたであらう。
私は詩を愛人と呼んだ、その頬に接吻した、
また時には詩を化物だと叫んで吐氣を覺えた。



私は確に詩に醜弄されたに相違ない、
だが私のそれに對する態度は嚴肅であつた、
そして恐怖は私を悲しい感情の人間に仕立てあげた。
然るに今日の自分はどうであるか。
私は恐怖の何物も感じないほど大膽不敵だ。
私は詩を薄暮の壁龕から引摺り出した。
私はその泣顔をぎら附く天日に曝した、
そして私は『お前の昨日の魅力は何處へいつたか』と詩
を嘲弄した。
ああ、今私は悲しい感情を失つて、
冷い第二の思想を拾つたのである……
第二の思想なるもの、
それが果して何の價值あるかを私は知らない、



恐らく乾枯びた葱か、
鎌詰の鱒以上に買へないであらう。



殺人鬼

『石は生きてゐる、御覽なさい』と石切場の老工夫は語る。

『動物のやうな皮膚に血管、

この筋肉の均齊美は何に譬へることが出来ない。

人間は盲目だ、石の汚い臓腑を見ずに済むが、

私はかうざくりと石を切つてゆくと、

血管から血潮が瀧のやうに流れることを知つてゐる。



ああ、夜又だ殺人鬼だ、かう思つてぎよつとすることがある。

外科醫の解剖に比較するのは僭越だが、

私は石の生きた節ぶしを豆腐のやうにばらす。

私は都會に出て石屋の前を通り、

曇々たる石の死骸を眺めて、その臭氣に鼻を蔽ふことがある。

だが澄み切つた天の高い秋、獨り石山に立て籠り、

にやりと笑ふ殺人鬼の仕事も、考へると壯快なものだ。』



蟋 蟀

私は夢に千丈の絶壁に立つ……

沈黙破れて舞樂の妙音沸き上る、

海萬波を孕んで落日の紅を呑む。

百尺の鯨口より天津風を吹き、

見る間に五色の雲となつて私を迎へる、

私この雲に乗つて虚空を彷徨ふ。

心地上を遠く離れたが、



蟋蟀の聲幽かに響くを覺える。
私にそれが死んだ母の聲のやうに聞え、
死んだ子供の聲のやうに聞え、
熱い涙滂沱として頬を濡らし、
驟雨を作つて數萬里の下へ落ちる。
地上の七草私の涙を受けて、
黄、紅、紫の色に燃える。
この時私地上へと飛び下りたが、
雲は私の足を離さない、
されど私の頭くの字を空間に描き、
漸次地上へ達したと覺えて、
蟋蟀の聲をはつきりと聞く。



臨海の氣

春信の『石山寺の紫式部』
私は欄干の前に、筆を片手に思念の女性が、
どうして源氏の作者であらねばならぬを知らない。
私はまた本圖に、湖水が海となつて、銀の波が洋々たる
諧律を奏でてゐる點を問題にしない。
更にまた私は、石山寺の紫式部に水景が、どうして無け
ればならないかを論じない。



然し若し彼女が夢に大海を臨みながら、構想に上つたならば、

私は本圖に大きな詩の發動を見ざるを得ない。

私は今紫式部のやうに、筆を片手にして書齋から庭を眺める……

ああ、何たる大海原の無制限よ、

北洋の極月は自然の亂舞だ、

眼前の氷山は金剛石の凱旋門を作る、

潮は光線の暴打に八裂の烽火を散らしてゐる。

だが誰か夏の海に自然の平和を知らないものがあらう。

南洋の海は紫紺の敷物千萬疊、

それを五彩の虹が、
天空から兩足を踏張つてゐる。



私は海氣に胸を脹らませて、

詩語を紙の上に滴らすであらう。



眼光

彼はちつと睨む……

空を飛ぶ鳥はばたと地上へ落ちる、

彼は鳥を批評したのでない、警告したのでない、ただ睨んだのみだ。

庭の花は彼の眼光を恐れて花瓣を閉ぢる、

彼の容貌はどんな處女にも愛される筈がない、

彼の眼は黒光りする、青光りする。



彼に睨まれると前を急ぐ川も歩みを止め、

戦慄し、畏縮し、過去を反省せざるを得ない。

彼はちつと睨む……

この時、時間はばたと停滞して静寂だ、

この時、ああこの時、彼は永劫の何物たるかを感じる。



蜘蛛

庭の小隅に大きく陣を張つた蜘蛛、
 彼は中央に鎮座して悠爾に生きる、
 彼は五十疊の部屋に瞑想する。
 彼は意を配して機來に備へる、
 彼は神授を待つて居然たりだ。
 彼は低頭食を求め賤奴でない、
 彼は宿引の犬となつて尻尾を振らない、



彼は縁日商人のやうな雀でない。
 彼は天に應じて法を守る、
 彼は長嘯して智を帷幄に集める。
 私は彼に大忍耐を見た、
 私は彼にアレキサンダーを見た、
 私は彼に上野の銅像隆盛を見た。
 されど歌舞伎役者は蜘蛛に妖魔を見て、
 白紙千丈のテープを吐かせる。
 畫家は彼に構圖の妙想を見て、
 樹間の網に白玉を連ねさせる。
 私は獨坐客なき時、
 彼が一筋の銀絲に天井を下るを見て、
 生死を賭する勇の表象を思ふであらう。



宋代深紫色圓鉢

長谷川巳之吉氏蒐集品題贊

何といふ淳美の格調だ、
 色の妖幻といつた所で半分の意表しか無い、
 大空のやうに無言の呪文を唱へる、
 私は喜んでその巫蠱に拐されゆく。
 人は古代希臘美の單純を褒めるが、
 それは本支那陶器を知らないものの言だ。
 ああ、陶工はどこにこの深紫を見出したであらうか、



彼はこれを粘土の上に摸したのでない……
 色はベンガル灣水のやうに、心の陰極から浮動して来る。
 私はいふ、色でない、香氣だ、
 香氣でない、詩だ、
 詩でない、美と眞の綜合交叉だ、
 否な、宇宙だ。
 私はこの圓鉢を掌上に載せ、
 自然の本性に觸れてその諧律に戦き、
 明快しかも玄虚なる抒情を色に讀むであらう、
 あな、恐るべく敬すべき哉と叫ぶであらう。



歌舞伎女形

お前は男だ、

だが心のなかに潜む『女』に魅せられ、誑かされて、『男』を離れよう離れようとする……

この苦悶がお前の奇怪な表情となり、不思議な描線を作つて、私共の眼前に顯れる。

お前の首は不自然だ、

だがお前は蠱惑的な角度を作り、つり上つた眼を脹ら



ませて、実際の女が知らないやうな催眠的な世界を覗きこむ。

お前の聲は異様だ、普通でない。

病的動機を藝術化した場合の叫だ、

第四次元國の人間が発する放埒な聲だ。

お前は心のなかに苛立つ感受性に悩まされ、幻の傀儡となつて顯れる、

お前は私共の住む常規の世界を掻き亂すために輝く星だ、

お前は悩ましく美はしい夢だ。



能面孫次郎

孫次郎と呼ばれて、闇黒の帳をすつと左右に開いて、顯れたのは女のお前だ。名と實が、このぐらゐ離反しては痛快だ、全く驚天動地だ。私がお前などと、馴々しい言葉を使ふことは、天の許さない非禮であらう。面師は千萬人の女性美を、一滴一滴丹念に集めて、その精でお前を仕上げた。そして彼は大膽にも、神の不完全な手細工に、一顧を煩はすに至つた。神は人間の挑戦を、何と見給ふであらうか。僭越なりと怒り給ふか、それとも私共人間の技能を嘉し給ふか。私は神の返答を知りたい。



孫次郎事金剛右京が、この能面を打つたにしても、打たなかつたにしても、それは私の問題でない。私はただそれが、無可有の郷といつた薄暮の國から来て、生死一如の神祕を傳へんとするを知つてゐる、ああ、幽にして玄なる能面の女性よ、お前は生きた人間でありまたさうでもない。止むを得ざるに於ては、美の幻と云はねばならない。お前は早咲きの薔薇のやうに、赤唇を半開きにして、何か告げんとする、否な微笑んでゐる。そしてその微笑が幽かに全面に波動する。私はお前の細い兩眼に、生きた女性の妖艶が漂ふことを知つてゐるが、お前は恐らく死の絶對を見詰めて、それが怖いものでないと、眼の隠語を洩すに相違ないであらう。

私は常に藝術美を、均齊の一つに還元せんとして來た。私は棺に納まつた死者の顔が、誰も生前の粗雑と不整頓を忘れて、均齊



に淨化されてゐるを見て、神は顔に均齊のないものに靈界の扉を開き給はないことを知つた。ここに於て私はいふであらう、『孫次郎よ、お前は東洋の女性美が、純化の最大限度に立つて、遙か彼方の永劫を稱へる顔だ、即ち死の絶對に祝福された顔だ。』

だが能役者が、お前を被つて舞臺に舞ふ時、お前は歌手の朗々たる音律に答へて、生の瞬間的情趣に目覺める、そして官能に服従して、若々しい人間的變化に抵抗しないであらう。この時お前は、美の超人たるを忘れ、地上生活の笑と涙の珠玉を拾つて、それを金糸銀糸の抒情詩に繋ぐであらう。

註 能面孫次郎は、秀吉が天下第一であると讚美したさうだ。これは能樂三番目に使用される。金剛右京が、愛妻を失ひ、悲嘆の餘りに、その面貌を面に打つたといふ傳説が附いてゐる。



橋掛

橋掛は二つの世界をつなぐ、

『此處』と『其處』と『今日』と『明日』とを、また『光明』と『闇黒』とを。

午後の太陽は斜めに橋掛を打ち、

太鼓小鼓笛の合奏はここへ流れ込む。

私は假面をかぶつて橋掛を踊る。

人はいふ、『彼は諸國一見の僧だ、將來といふ名所をさし



ていそぐ。』

他の人はいふ、『彼は傳統の幽霊だ、今にあと御弔ひ給へ
とうなるであらう。』

だが私の踊る一曲は『今日だ、現在だ』……

一身に自然の法則と音律とを集め、

手を上げて空間を握り、足に永劫の時を踏みつける。

私が『三の松』の前に立ち、正面をきつと見詰める時、
見よ二つの世界は打つて一つになる。

私は靜に橋掛を踊る、靜に靜に、

恰も月が雲の空中を歩むかのやうに。



百萬を見る

靜を破る横笛一聲、

私は呪咀か魔の喚呼であるかを知らない。

それに續く合唱の叫號、まるで岸打つ波の反復、

波に終止符がないやうに、合唱は息詰る連續律だ。

その動的震搖が私共現代人の理能を亂すやうに覺え、

私共の本能的麻痺は遂に一つの活を入れる。

私は今久方振に『百萬』を見てゐる、



狂女は『阿彌陀佛なまふだ』と唱へて、舞臺を廻る、
この時彼女は人生の呪縛を斷つて、信仰の聖苑に舞ふや
うに見える。
私は古い失つた宇宙觀の歸來を迎へて、
狂女と共に現代を離脱するやうに感じる。
ああ、能樂に何たる迫力の貯藏があるであらう。
何たる純一素心の完了があるであらう。
狂女百萬は悲しんで亂れない、喜んで淫しない……
私は彼女に波の中性的抒情の拍節に觸れる。



哨戒機

私は哨戒機の轟音に目覺める。
寢卷のまま庭下駄を引掛け、
早朝の斜光が地に引く金線を歩く。
樹木は夜の闇に心を清めて、
今新しい一日の祭典に參せんとしてゐる。
青葉若葉は鼻や眼や肩を動かし、
争つて朝日に挨拶を送つてゐる。



楓は新衣を纏つてまるで青玉の山だ、
 櫛も椋の木も潮水の新鮮にずぶ濡れだ、
 ああ、何といふ不壊の平和だ、
 何といふ諧暢の完成だ。
 私は飛行機を聞くがその姿を見ない、
 飛行機は遠く彼方から庭の福祉を守つてゐる。
 庭は泰山の安妥を思つて謝恩の黙禱に入らんとしてゐる。



天の浮橋

『諸君、手品を一つ、
 これは御覧のやうな一枚の風呂敷……
 種も仕掛も何もない、
 御不審とあらば、手に取つて調べ給へ、
 私は何かこの中から取り出すだらうが、
 諸君の御希望に添はないかも知れない。
 私はかう風呂敷をばたばたさせる、諸君、よく御目を留



め給へ。

ほら出た……提灯が三つ、蠟燭があかあかと燃えてゐる。
ほらまた出た、今度は金魚が七つ、皆な硝子の壺に泳いでゐる、

水も波々とこれこの通り……

見物人はいふ、『なんだ、君は詩人でなくて下等な手品師か。』

私は答へる、『昔のこと神様は、一本の竿から鳥をお取り出しになつた。』

それは日本歴史に有名な天の浮橋の奇術……人間は、私

も諸君も皆な手品師だ。

諸君、手をぼんと叩いて御覽なさい、音が出る、

これが無から有を取り出す手品でなくて何であらう。』



花

花よ、

お前は梅でも牡丹でもない、

私に永劫を暗示する神祕の門だ……

お前は二つの世界が分れる所、

目標となつて、

虚實の境に立つてゐる。

耳あるものはお前の音譜を聞いて、



自然の母胎に歸るであらう、
目あるものはお前の色に酔つて、
夢の微笑に觸れるであらう、
私はお前の香氣を嗅いで、
人語の賤しい分散を恥ぢる。
花よ、
私はお前を眺めて、
人性を寸断し、
土壤に捨てて、
風と共に、胡蝶と共に、
お前の隠れた門を潜つて、
永劫の旅に上るであらう。
最早や私に知性の遊戯はない、



感情の起伏はない、
私は黙々として、
無限の召喚に答へるであらう。



笛の音

笛の音は私を呼んでゐる、
更けゆく夜の書齋は寂しい、
私は読みかけ本を閉ぢ耳を蔽てる。
笛は何を私に叫んでゐるだらうか、
暴風雨來を警告してゐるのか、
津波だ津波だと叫號してゐるのか、
それとも人生の破産を豫言してゐるのか、



信念の缺乏を嘲つてゐるのか、
本能の墜落を嘆いてゐるのか、
青春の頹廢を悼んでゐるのか、
笛の音は私を呼んでゐる、
私は黙々と机の前に坐つて耳を蔽てる。
笛は何を私に叫んでゐるだらうか、
肉體の老を悲しんでゐるのか、
靈の涸渴を戒めてゐるのか、
それとも世界の滅亡を宣言してゐるのか、
ああ、笛の音は恐怖か脅迫か、
それとも歡喜か禮讚か。
私は立つて書齋の窓を開けて外を眺める、
闇い空に無数の星が煌いてゐる、



私は手足を崖に横たへる、
 人は私の恰好のいいのを褒める、
 そしていふ、
 『何といふ見事な曲線だ、新月と雖も争ふことが出来な
 い。』
 私は影を海上に流れさす、
 これが棚引く、箒星のやうな動きを見せる、

虹




闇い庭に櫻の花瓣が散つて雪のやうだ。



人は私の體により添つて、
 私の閃めく胸に觸れる、いい氣持で心を天に上らせる。
 だが、おおだが『空中の美觀』だなどと褒めることは止
 めて下さい。
 誰が精神を盡したものの悲しい犠牲を知つてゐよう？
 みぢめなもの、これが私だ、大空に最善を蕩盡して、
 人々の餓が満たされたが最期、
 私は無言に消えなければならぬ。

昭和十九年六月五日 初版印刷
 昭和十九年六月八日 初發行
 (128510合資會社富山房)
 日本出版會承認
 4240207號

八絃頌一百篇



著者 野口米次郎
 發行者 坂本守正
 印刷者 白井赫太郎
 配給元 日本出版配給株式會社

東京都神田區神保町一丁目三番地
 株式會社富山房創立事務所
 設立代表者 坂本守正
 合資會社富山房
 會員番號 一七八五〇
 電話神田二、一七一、一七八番

發行所

定價金七圓五拾錢

印刷所 精興社 (東京41) 岡森製本

終

